

自然は観想し生み出す： プロティノスの立場とコールリッジの解釈

西村洋平

はじめに

プロティノスの思想の影響は、文学や芸術の分野にも及んでいることはつとに知られている。本稿が取り上げるのは、「自然、観想、一者について」と題された第30論考の一節と、その箇所を引用し独自の哲学を展開するコールリッジの『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*)である。私はプロティノス研究を専門としてきたため、コールリッジについては完全な素人である。プロティノスの難読テキストに対するコールリッジの一つの提案が、現代の校訂版でも採用されているがコールリッジ自身がどのように読んでいるのかはあまり論じられる機会がないように思われる。プロティノス解釈としては逸脱してはいるが、何かプロティノスと親近的な要素がコールリッジに見られる。それを明らかにするのが本研究の目指すところである。

コールリッジは、後に自らの『文学的自叙伝』を振り返り「非体系的な雑録」(*an immethodical miscellany*)や「未熟」(*immature*)と評している¹。したがって、この著作からコールリッジ哲学を抽出することも、プロティノス哲学に対する彼の最終的な見解を引き出すことはできないだろう。とはいえ、初期のコールリッジの哲学的思索のなかで、プロティノスがどのように読まれたのかは明らかにできるだろう。

そこで以下では、プロティノスの当該テキストを取り上げ、現代の注釈などを参照しつつ私なりの「プロティノス解釈」を提示する(0.から3.)。続いて、コールリッジの解釈について論じ(4.から6.)、プロティノスとコールリッジの違いと親近性について論じることでまとめにかえたい(7.)。

0. 前置き

まずは、問題の出発点となるプロティノスのテキスト(Text=T)を引用しよう。そして解釈の前置きとして、簡単な説明をここでしておきたい。なお下線部は、コールリッジ

(Coleridge)によって引用 (Citation) され解釈される箇所であり、便宜上 [C1]～[C3]とした。

T1 = プロティノス第 30 論考「自然、観想、一者について」(III, 8) 4.1-14²

「[C1] そしてもし誰かが、何のために生み出すのかと〈自然〉に尋ね、〈自然〉が耳を傾けて語ろうと欲するとしたら、次のように語ることだろう。『私は沈黙のうちにあり、語るという習慣を持たない。そのように、あなた自身も尋ねるのではなく、沈黙のうちで理解しなければなりません。[C2]では、何を理解しなければならなかったのでしょうか。それは、生み出されたものが私の観もの—沈黙*—であること、つまり観想対象として自然に生じたものであることを理解しなければなりません。そして私はこのような観想から生まれてきたので、私は観ることを愛することが自然であるということを理解しなければなりません。[C3]そして、ちょうど幾何学者が観想をしながら線を描くように、私の観想する働きが、観想対象を生み出すのです。ただし私は線を描かないが、私が観想すると、物体の線が落ちてくるように³存立するのです。そして、母や産みの親が経験することが私にも起きているのです。なぜなら、かの産みの親たちもまた観想から生まれるからであり、私の誕生に際して、かの者たちが何か働きかけをしたわけではないからである。そうではなく、かの者たちが偉大なる形成原理であること、そして自己自身を観想することで、私は産まれたのだから。』」

まず φύσις とは世界の産出的原理であり、実体化した存在としてここでは〈自然〉(Nature)と表記し、「自然的」(natural)といった他の用法から区別することにする。そしてこの〈自然〉の「母」とされているのが万有の魂であり、「産みの親」とは万有の魂が保持する世界の形成原理(ロゴスとも言われる)である⁵。また、*を付した「沈黙」(4.5, σιῶπησις)はすべての写本が伝える読みであるが、古くから多くの提案がなされている。コールリッジの提案が採用されることになるのもこの箇所であるが、これについては以下の 6.で扱うことにする。

1. 問題の背景

エジプトのピラミッドやナスカの地上絵など、大きくて精巧に作られたものがあるとき、我々はなぜ、どうやって作ったのかと疑問に思うだろう。これらの制作物を理解することは、作り手の意図や、制作の計画や思索と切り離すことはできない。では、大きくよくできたこの世界の場合はどうだろうか。海や大地、そこに生きる生物と地球環境、さらに宇宙全体を眺めてみよう(以下、「世界」とは宇宙を含むそうした全体を指すものとする)。正六面体の塩の結晶、均質で輝く鉱物、生き物の体の仕組みや、生態系、星々の周期的な運行など、世界はよくできている。これらはなぜそのような仕方であるのか。どのようにしてこのようなあり方となったのか。T1でプロティノスは、そうした問いに向き合っている。

世界のあり方は現代の我々を知的に刺激するし探究の対象であり続けている。その限りでは、プロティノスが向き合った問いを我々も共有していると言える。しかし、現代の我々は世界が誰かによって作られたかどうかをあまり問題にしないのに対して、古代はまさにそこが論点となった。古代には、神のような存在が特別な意図を持って作り出したと考える立場もあれば、それを否定し自然に(偶然に)できたと考える立場もある。前者の立場をとるのがプラトンであり、ユダヤ・キリスト教的世界創造論もこちらのグループに入るだろう。世界に始まりはなく、原子の相互影響によって世界が成り立っていると考ええるエピクロス派は後者の代表であろう(ただし、エピクロス派が神を否定したわけではない)。

プラトン主義を標榜するプロティノスは、当然前者の立場をとる。この世界は、魂とその下位の原理である〈自然〉が生み出したものである。しかしプロティノスは、プラトンが世界の制作について語る『ティマイオス』で示唆することとは異なり、〈自然〉が職人のように世界を制作することを否定する⁶。じつはプラトン主義を批判する多くの立場が、世界制作者の職人的あり方を批判している。たとえばエピクロス派は、神の「意志・選択」(προαίρεσις)や「計画・推量」(λογισμός)を否定している。またアリストテレス主義も、世界の形成原理である〈自然〉を「非理的知(ロゴスを欠いている)」(ἄλογος)なものとした⁷。

世界を生み出した〈自然〉という原理が、計画を練ったり思索したりして職人のように世界を生み出したという見解を否定しつつも、プロティノスは〈自然〉が知的認識を

まったく持たない存在であることも否定する。この世界はピラミッドのように設計者や労働者が作ったものではないが、設計図や制作者なしにたまたま存在しているのではない。世界の背後には知的な存在がある。だがそれは何か、そしてどのように世界を生み出したのか。これが T1 の背後にあるプロティノスの問題意識である。そして彼の立場によれば、観想をする〈自然〉という存在があり、その観想が世界を生み出している、という。

2. 「何のために」

プロティノスは、本来は語ることがないものをしばしば擬人化して語らせている⁸。ここではこの擬人法のレトリックが持つ効果ではなく、語られている内容の吟味を行いたい。「何のために生み出すのか」という問い、〈自然〉はどのように応答しているのだろうか。

そもそも「何のために」(τίνος ἕνεκα)という問いは、〈自然〉に世界を生み出した目的を尋ねるものである。これは、「何ゆえに／なぜ」(διὰ τί)のように、理由を尋ねることとは異なる。たとえばプラトン(*Lys.* 218E)が用いる例を引き合いに出すならば、何のために医者と呼ぶのかと尋ねられれば「健康になるために」(医者と呼ぶ目的)と答えるだろうが、なぜ医者と呼ぶのかと尋ねられれば「病気だからだ」(医者と呼ぶ理由)と答えるだろう⁹。問われているものが向かう先のもの(目的)が何かを尋ねているのが「何のために」(τίνος ἕνεκα)という問いである。

なお、ここで問われている「目的」という概念は、目標のように、人が意識的に設定するものだけではない。たとえば、プロティノスより少し前のアリストテレス主義者アレクサンドロスによれば、目的因とは個々のものがそれを目指して活動することで完全なものとなるものである¹⁰。もし理性的であることが人間の本質であるならば、(人がそうあることを意識的に目標設定していようがいまいが)理性的であることは人間にとっての目的であり、理性的なものとなることで人ははじめて完全に人となる。こうした古代の目的論的世界観に鑑みるならば、意識的な存在以外の自然物にも目的が備わっていることになる(以下、自然学的な目的とする)。植物が花を咲かせ種をつけるのは植物の目的(終極)であり、火が上昇することは火の活動の完全なあり方であり、上昇すること(とその先の上方の領域)は火にとっての目的(終極)となる。

T1より前に、自然が観想することは述べられていることから、「何のために」という問いは上述の二つの意味(意識的・心的な目的と、自然学的な目的)を持ちうるだろう。もちろん両者が一致することもある。たとえば、生きることの目的が「幸福になること」だとする。人は(それがどのようなものであれ)幸福になることを目標として設定するだけでなく、幸福を人間の本性の完成という仕方理解するならば、「幸福」は自然学的な意味でも生の目的となるだろう。

では、〈自然〉は世界を生み出す目的を問われ、どのように答えているのだろうか。

3. 〈自然〉の回答

問いに対して〈自然〉は、「沈黙して理解すべきだ」(συνιέναι ... σιωπῇ)と述べている¹¹。理解すべきこととして語られる内容は、世界が「観想対象として自然に(φύσει)生じてきたもの」であり、〈自然〉は「観ることを愛することが自然である(τὴν φύσιν ἔχειν)」ということである。ここでは φύσις という語が繰り返し用いられ、世界の創出が自然的であること、観想を愛するという特徴が〈自然〉に自然的に備わることが言われている。

観想が観想対象を自然に生み出すことは、幾何学者の例で説明されている¹²。幾何学者が、例えばメネラオスの定理を用いて別の定理を証明しようとするとき、頭の中で思い描くのであれ、何かの素材上に引くのであれ、線を描くことだろう。それは幾何学者の観想にとって自然的である。数学者が数字を用い、論理学者が言葉を用いるように、幾何学は線(図形)を描くことを特徴とする。〈自然〉の観想の特徴は、この物的な世界そのものを生み出すということである。

したがって、問われている目的に関して言えば、〈自然〉は次のように回答していることになるだろう。すなわち、〈自然〉には観想することが本質的な働きとして備わっており、その観想の実現が目的なのだ。幾何学者は、線を描きながら、幾何学的な定理について理解することを終極として目指している。〈自然〉もまた観想を目指しており、その過程で世界を生み出している¹³。端的に言えば、世界を生み出すこと目的は観想という〈自然〉本来の働きの実現だということになる。

このように理解するならば、前節で自然学的な目的が問題となっていたとも読めるが、観想が目的であるならば心的な要素も含まれているだろう。プロティノスは、アリ

ストテレス主義のように〈自然〉を「非理知的なもの」とは考えない。上掲引用箇所
の〈自然〉の独白の後、プロティノスによる解釈が展開されるが(4.15 以下)、そこで自然
の観想とは、「理解」(σύνεσις)であり、「一種の自己知覚・自己意識」(οἶον
συναίσθησις)だとされる(4.19-20)。前者の「理解」は、自然が沈黙して理解するよう
に(συνιέναι)と述べていた動詞の名詞形である。後者の「自己知覚・自己意識」
(συναίσθησις)とは、直訳すると「ともに」(συν)生じる「感覚」(αἴσθησις)である(ラ
テン語では *conscientia*)。アリストテレス『魂について』第3巻第2章よれば、複数の
個別の感覚(e.g. 聴覚と視覚)によって共通に感覚されるもの(e.g. 運動など)を指す
語であるが、プロティノスにおいては「自己知覚・自己意識」として用いられている¹⁴。
もちろん、その自己意識は寝た人の状態に近いとされるが(4.24-25)、これらの心的
作用を指す語からも明らかなように、〈自然〉は非理知的なものとはされていないので
ある。

T1 最後の一節で、〈自然〉そのものを生み出したもの(万有の魂や形成原理として
のロゴス)は、自己自身を観想することで〈自然〉を生み出し、何か働きかけたのでは
ないとされる(4.12-14)。これと同じことが〈自然〉にも生じており、〈自然〉は自己知覚と
いう観想によって世界を生み出すのである。ここで「働きかけ」(πράττειν)とは、技術
者が何かを制作するときに素材に対して働きかけることと、その制作を目的としてい
ることを含意しているだろう。そうした働きかけが自然による世界の産出において否
定されているのである。

この主張を次のように理解してみたい。なぜ自然環境や生態系を保全すべきなの
か考えてみよう。〈自然〉は何か特定の意図をもって自然環境や生態系を生み出して
いるのではない、と答えることだろう。たとえば、絵画は展示や鑑賞されることといった
特定の意図を持って制作されるのであり、シュレッダーにかけることやトマトスープを
かけたりすることは(それを意図した作品も実際にはあるが)意図されていない。その
ような仕方では絵画を使用(破壊)することは、意図に反するのでやめるべきだろう。だ
が、自然世界にそういう意図を見出して保全すべきだと言うことはできない。

しかし、世界はただ偶然そこにあるのでもない。世界は〈自然〉が完全なあり方を目
指して生み出したものである。〈自然〉の完全なあり方とは、沈黙のうちにおける観想
であり、我々は言葉などを使ってその観想を理解することはできない。その観想は弱

い自己意識のようなものだという。例えば、乳児の自己知覚は我々のそれとは異なり、「私はお腹がすいた」とか「私は眠い」といった言語的な仕方では把握はされない。乳児の自己知覚は、泣くという行為として現れるだろう。劣った観想から生じたものだからといって、無視すべきことにはならない。我々は乳児の気持ちになって理解しようとするだろう。自然環境を保全すべきかどうかという議論は、そうした理解に基づいてなされるべきであり、我々が価値や意義があるかどうかと言語的な仕方ではなされるべきではない、とプロティノスの〈自然〉は答えることになるだろう。

4. コールリッジによる引用

次に、この〈自然〉による語りに関心を示したコールリッジに注目したい。コールリッジは『文学的自叙伝』(*Biographia Literaria*¹⁵)のいわゆる「哲学的章」(philosophical chapters)の中の3箇所、プロティノス第30論考(III, 8)第4章を引用している(T1中の[C1]～[C3])。それぞれ順に見ていくことにしたい。以下、コールリッジの邦訳は東京コールリッジ研究会のものをを用いる。プロティノス関連の箇所に関しても、コールリッジによる英訳のニュアンスを汲むため同邦訳に従い、T1の訳に合わせることはしていないが、訳語や記号など一部改変している。またコールリッジの原語の挿入は()で示す。その際、東京コールリッジ研究会による挿入と引用者による挿入が混在しているが、煩瑣となることを避けるため区別をしていない。

T2 = BL I, 239–241 (邦訳 212)

「このような思索、蓋然性の高い出来事、それを確認する洞察力、直観知が、究極的にどのようにして、どこから起こるのかは、事実によってのみ知り得るのです。いま提示した問いに対しては、プロティノスが同様の難問について、〈自然〉ならこう答えるだろうと想定した言葉をあげておきましょう。『[C1]誰かが〈自然〉に、どのようにして働いているのかと問い、〈自然〉が丁重に耳を傾けて答えてくれるとしたら、〈自然〉は次のように答えるだろう—私の心を質問で煩わしたりせずに、沈黙のうちに理解しなければならない。ちょうど私が沈黙のうちにあって、言葉を用いずに仕事をしているように。』」

この章の冒頭でコールリッジは、諸概念を根源的事実として受け入れ、それ以上分析しようとしないう人々や、そうした概念の配列などの分析で十分だとする立場の人々に向けては語らないのだと前置きしつつ、そうした経験的な概念の向こう側にある対象について直観する超越論的な哲学について語っている¹⁶。超越的な領域の直観はどのように生じるのかを示すために、以上で論じてきた第 30 論考(III, 8)の〈自然〉による語りの箇所と、T2 の直後では、プロティノス第 32 論考「知性的な対象は知性の外にはないこと、善について」(V, 5)第 8 章が引用されている。後者の引用について、今回は扱わないことにする。

コールリッジ哲学の発展を論じる Halmi によれば、カント哲学は超越論的な道を示したが、あくまでも概念や人間の理性は外界を分析する認識的な基準となるもの(regulative)でしかない。コールリッジにとって、世界がどのように構成されているのかを伝える役割を持たない点(constitutive)で、カント哲学は不十分であった(Halmi 2023, 219)。世界の構成(もの自体)を明らかにする直観という事実をコールリッジに示したのがプロティノスであったと言えるだろう。

現代の論者の多くは、T1 に関して、〈自然〉がこの世界をどのように生み出したのかに着目する。それに対してコールリッジは、世界のあり方を理解する直観がどのようにして生じるのかを説明するものとして T1 を引用している。そして、この着眼点は重要であるように思われる。プロティノスは、通常の仕方では理解できないような認識のあり方を語ろうとしている。〈自然〉を擬人化して語らせるというレトリックを用いているのもそのためであろう。

すでに確認したように、プロティノスにとって沈黙における〈自然〉の活動は、弱い、眠りの状態における自己意識のようなものであり、〈自然〉はそうした状態になることで理解することを要求している。コールリッジは、〈自然〉が語る認識のあり方に、直観という特別な認識を読み取っている。彼の読解について、もう少し細かく見てみることにする。

5. 〈自然〉を理解すること

コールリッジは Perna 版(Basle, 1580)の再版(1615)を所有していたようで、テキストはそれを用いている¹⁷。訳については、トマス・テイラーの英訳が 1794 年に出されて

いるが、参照しているかどうかは不明である。コールリッジは「〈自然〉が丁重に耳を傾けて答えてくれるとしたら」(if graciously she vouchsafe to listen and speak)と正しく訳している箇所について(4.2, εἰ τοῦ ἐρωτῶντος ἐθέλοι ἐπαίειν καὶ λέγειν)、テイラーは尋ねる人を主語に取るという明らかな誤訳をしている(if he wishes to hear her speak)。また、「何のために生み出すのか」(4.1, τίνος ἔνεκα ποιεῖ)という目的を尋ねる問いについては、テイラーの訳は「誰のために」(for whose sake she operates)となっているのに対して¹⁸、「どのようにして働いているのか」(how she works)と訳している。これは、経験やそれに由来する観念を超えた自然のあり方を直観する仕方を模索する、コールリッジ自身の文脈に合わせた自由な訳だと言える。

興味深いのが、「理解する」(understand)の原語 συνιέναι に関する以下の注である。

T3 = BL I, 240(邦訳 214)

『『エネアデス(Enneades)』三・八・三〔現代の版では四〕〕に出て来るギリシア語 συνιέναι は「理解する(understand)」という語では不完全にしか表せない。英語の慣用句「自分とともに行く(to go along with me)」がその表現に最も近い。この後に続く含蓄豊かな文章は、明らかに原形が損なわれていると思われる。[…][C2]では、我々は何を理解すべきなのであろうか。生じてくるものは何であれすべて直観知(intuition)であり、私は沈黙のうちにあるということ。そして、このようにして生まれたものは、その本性からして、^テ^オ^レ^ー^マ観想されたものつまり観想の形相(a theorem or form of contemplation)だということである。この観想によって私に生じるもの(the birth)は、^ナ^ト^ウ^ラ[・]^ナ^ト^ウ^ラ^ン^ス観想的な本性を持つに至るのである¹⁹。『[…]^ナ^ト^ウ^ラ[・]^ナ^ト^ウ^ラ^ン^ス産み出す自然のプロセスと幾何学者のプロセスとの比較がこの後に続いているが、それは哲学の核心から引き出されたものである。』

συνιέναι, *sunienai* は、分解すると συν-, *sun-*という前置詞(英語の with に相当)と, *ιέναι*, *hienai* (「放つ、発する」という動詞 ἵημι, *hiēmi* の不定詞)という動詞の合成語であり、通常「知覚すること」(perceive)、「気づくこと」(to be aware of)や「理解するこ

と」(understand)と訳される。go along with という表現が近いと述べるコールリッジは、συνιέναι の συν-が持つニュアンスを出したかったのであろう(邦訳は「同意する」としているが、ここではギリシア語のニュアンスを汲んで「ともに行く」と訳出した)。同じ章の少し後でコールリッジは、シェリングを引きながら、主体(知性)と客体(自然)の「協働」(concurrence < Zusammentreffen)を説明することが哲学の課題だとしている²⁰。コールリッジは、συνιέναι の訳として go along with を提案するとき、シェリングの concurrence (Zusammentreffen)を意識している可能性がある²¹。コールリッジは、客体である「自然」から得られる概念や観念をたんに把握したり分析したりするような悟性(Understanding)による認識ではなく、「自然」と一致してその存在そのものとなって理解すべきだと考えているのだろう。

それでも understand という訳語をあてた点は興味深い。テイラーも understand と訳しているが、上述のようにコールリッジがテイラーの英訳を見ていたかは不明である²²。ギリシア語—英語辞典がまだない頃であり(Liddell and Scott による *A Greek-English Lexicon* は 1843 年)、何か辞書に従ったという可能性も低いだろう。コールリッジの深いギリシア語知識では、συνιέναι を understand とするのが自然だった、という説明くらいしかここではできない²³。Perna 版のギリシア語に並行して掲載されている Ficinus のラテン語訳は intelligere となっており、これにならない understand という訳語を選んだ可能性もある。

6. 沈黙をめぐる—〈自然〉の直観

T3 で下線を引いた箇所は、T1 で「沈黙*」と訳されていた箇所について、コールリッジがテキスト修正を提案する箇所である。〈自然〉から生じてきたものが「私の観もの—沈黙—」(4.5, θεάμα ἐμόν, σιώπησις)と述べられているが、写本が伝える「沈黙」(σιώπησις, *siōpēsis*)という名詞は解釈なしには読めないし、訳はぎこちないものとならざるをえない。コールリッジ自身も「明らかに原形が損なわれている」と指摘しているが、このまま読む場合には、「観もの」を同格的に説明する挿入という読みの提案が底本ではなされており、T1 での邦訳もそれに従っている。これに対して、多くの研究者が削除あるいは別の読みを提案している。その一つが、コールリッジが提案する「私は沈黙のうちにいる(I silent)」(ἐμοῦ σιωπώσης, *emou siōpōsēs*)である。

σιωπώσης と分詞の属格にすることで、絶対分詞構文とすれば、文法的な読みづらさがなくなる(対格として θεάμα, *theama* にかかる ἐμόν, *emon* を ἐμοῦ, *emou* という属格にするのは、この属格による独立分詞構文の主語とするためである)。現代スタンダードな校訂版を編纂した Henry と Schwyzer は、出版時には σιωπήσις という名詞を印刷したが、後にコールリッジ提案の σιωπώσης を採用している²⁴。

二つの読みの意味の違いを考えてみよう。写本が伝える名詞のまま読めば、沈黙は〈自然〉が生み出したもの(この世界)であることになるが、コールリッジなどの提案による分詞の読みは、〈自然〉が沈黙の主体だということになる。多くの論者が σιωπήσις という名詞に当惑するのは、世界が沈黙であるというのがおかしいと考えるからである。

しかしコールリッジ自身の解釈は、名詞形の読みをサポートする論拠を提示してくれる。T2 の少し後でコールリッジは、再びプロティノスを次のように引用している。

T4 = BL I, 251-2 (邦訳 222-3)

「部分の関連性や部分の論理的依存関係は見られ記憶されるでしょうが、その全体は、基礎を欠き空虚なものであって、生きた接触によって維持されることもなく、〔自己〕実現的な直観(*realizing intuition*²⁵)が伴っていないのです。その直観は、直観の実在を肯定する行為によって、またその行為において実在するものとなるのであり、存在するがゆえに知られ、知られるがゆえに存在するものなのです。擬人化した自然に語らせているプロティノスの次の言葉は、哲学する力にも当てはめることができます。『[C3]私にとっては、観想の行為が観想される対象物を生み出すのです。ちょうど観想する幾何学者がそれに対応する線を描くように。しかし私の場合は線を描くのではなく単に観想することで、事物を表す姿が立ち現れて存立するのです。』『エンネアデス』三・八・四」

コールリッジは、プロティノスのテキストの解釈を行なっているわけではない。したがって、彼が論じる文脈から彼がどのように当該箇所[C3]を読んだのかを解釈する必要がある。T4 は、彼が哲学の基盤となる認識のあり方について論じる文脈にある。T4 では、存在全体(真理)の直観なしには哲学は言葉や概念の遊戯であり、目の見

えない人における幾何光学と同じだとされている。直観は、その働きそのものが自らの実在を示すような自己確証的な存在であるだけではなく、その直観の働きそのものによって自らを存在させる自己存立的なものである。T4 の直後では「汝自身を知れ」という格言を出しているが、「自己自身を知る」という活動はまさに「自己自身を知る」という活動をしている自己を知ることであり、この活動が自ら(自己を知っているという自己自身)を実現・存在させている²⁶。こうした直観のあり方を説明するために、コールリッジはプロティノスにおける〈自然〉の観想とその観想による〈世界の〉産出を引き合いに出している。

こうしたコールリッジの直観理解に鑑みるならば、この文脈で引用されている[C3]の〈自然〉の観想と、その観想物である世界を、コールリッジは同一のものと解釈していると考えられるだろう(もちろんコールリッジがそうした世界観を共有するかは別である)。実際 T3 のプロティノスの翻訳[C2]でコールリッジは、私が「観もの」と訳した〈自然〉の観想対象である *θέαμα*, *theama* (sight, spectacle) を、「直観知」(intuition)と訳している。〈自然〉は、観想することによって観もの(直観知)であり、その観もの(プロティノスにとっての世界、コールリッジにとっては直観知)を存在させている。

このコールリッジの解釈は、生み出された世界が沈黙である、という写本が伝える読みをうまく説明する。というのもこの解釈に従えば、世界とは沈黙のうちで観想するとされる〈自然〉そのものだからである。*σιώπησις* という名詞の読みに対して現代の解釈者たちが危惧する懸念に接していたならば、コールリッジはこの名詞の読みを擁護し、この世界とは〈自然〉の観想活動(直観)そのものであり問題はないのだと応答したことだろう。ただし繰り返すように、コールリッジ自身はプロティノス解釈をしているというよりも、直観のあり方を説明する一例としてプロティノスを引用している点には留意すべきであろう。

もちろん、〈自然〉を生み出した母(万有の魂)と〈自然〉が異なるように、〈自然〉と〈自然〉が生み出した世界は別のものである²⁷。そのため、世界を〈自然〉の直観とする読みはプロティノスの見解とは異なるものである。しかしこの差異は、コールリッジによるプロティノス解釈の瑕疵というよりも、彼の哲学の独自性を示している。

7. まとめにかえて

コールリッジによるプロティノスの引用は、シェリング哲学に向かう手前の直観論の中にある。彼は、哲学本来が出発点とすべき認識の基盤をプロティノスにおける〈自然〉の観想に見出していた。ただし、プロティノス自身が〈自然〉に認めていた自己知覚は、非理性的なものではないが理性的と言えるものでもない。第3節では乳児の知覚に類似的なものとしたが、プロティノス自身は「弱い観想」(4.30)としている。このような観想はプロティノスにとって哲学が目指すべき認識ではなく、コールリッジとの相違点はここにある。しかし、コールリッジはこのような認識に新たな光を当て独自の思想を展開したと言える。〈自然〉の(プロティノスにとっては弱い)自己意識は、「単に思惟的でも単に実践的でもなくて、両者が一つになっている」(BL I, 252)ものである。

そのような相違があるものの、プロティノスは〈自然〉より上位の魂という高次のレベルで、コールリッジが語るような直観を重視している。T4では、直観の働きが「直観の实在を肯定する行為によって、またその行為において実在するもの」だと言われていた。このような自己実現的直観(realizing intuition)は、プロティノス認識論においては魂を超越した知性の働き特徴であり、魂にとっては目指すべき認識である。

コールリッジがBLの第6章末尾に引用するプロティノスの『エンネアデス』第1論考「美について」には、「魂は美しくならなければ美しいものを見ることはできない」(I, 6, 9.31-2)とある。ここでの美の認識は、通常の認識と異なっている。例えば、外部にあるリンゴを知ることは、形相にせよ表象にせよ、リンゴに似た何かを内部に受け取ることである。しかし認識されたリンゴ(丸い形、赤い色 etc.)は、リンゴそのものではない。美を見ることとは、そうした認識主体と対象が異なるような外的な認識ではなく、自分自身が美しいものとなることで実現するものだという。

コールリッジの直観とプロティノスの美の認識を重ねるならば次のように言えるだろう。自分の中にある美の認識は、自分が美しい(立派である)ことを認識しているのだと示す行為によって(つまり本当に立派な行為をすることによって)、そしてそのような行為において実際に(自分の)美の認識が実在する。このような認識を目指すという点で、プロティノスとコールリッジは本質的に一致していると言えるだろう。また、その出発点に「倫理」があったという点でも共通している。プロティノスにとって魂が認識すべき「美」とは徳のことだからである²⁸。そしてコールリッジは、T2の箇所の直後、誰

もが直観という能力を備えているが、全員が同じようにその力を発達させるのではないと述べ、次のように語る。

T5 = BL I, 242 (邦訳 215)

「精神のあらゆる器官は、それに対応する精神の世界に合わせて作られてはいませんが、これらの精神の器官は、すべての者に同じように発達しているわけではありません。しかし、精神の器官はすべての者に現実中存在しており、これらはまず倫理的存在として現れてきます。そうでなければ、世俗の人間でもまったく品性劣悪という訳でないなら、純真で私欲のない善人を、憐みと尊敬との矛盾した感情を懷いて眺めるということが、どうして起こり得るでしょうか。『かわいそうに。彼はこの世には向いていない。』[……]人は天へ上昇するか地に埋没するか、いずれかを取らねばならないのです。」(強調はコールリッジ)

理想的な善人に対して現実の厳しい世界を語る人も、この世界から、理想的なあり方を垣間見ている。どのような人も、そうした理想への直観があるという。コールリッジによれば、人間の精神はそうした対象(善)に合わせて作られているからである。そのことに気づける場が、「倫理」(moral)であるという。倫理的な場において人は、理想的なあり方を目指すのか、そうではないのか迫られている。善人を見て「かわいそうに」と思いつつも、「現実の世界はそう甘くないのだ」と語るとは、この地に埋没することであろう。これは、自己自身が理想について直観し天への上昇を目指しうる倫理的存在であるという現実を見ないことであろう。

しかしこの理想的なあり方を直観しているということ自体が、その人に理想を直観する精神的な器官があることの証であろう。コールリッジは、そうした器官を持っているということと、沈黙して理解せよという〈自然〉の語りを意識しつつ、「静かに (within themselves) 解釈し理解できる人たちだけが、哲学的想像力つまり自己直観の神聖な力を獲得できる」(BL I, 241-2)と述べている。

もちろん、コールリッジが沈黙して理解せよとする〈自然〉の語りに見出した自己意識は、プロティノスが魂について語るような明確な(コールリッジにとっては思惟的な)認識とは異なるかもしれない。本研究ではプロティノスを解釈する文脈に着目した

けにとどまり、コールリッジ哲学の認識論を踏まえた詳しい分析はできなかった。コールリッジが「想像力」(imagination)という言葉で様々に論じた心的機能や、理性と悟性の区別などは、φαντασία、phantasia(表象力)概念の受容史や、美的把握をめぐるドイツ観念論の議論などを踏まえて、改めて論じる必要がある。この点については別稿を期すことにしたい²⁹。

¹ BL 執筆の経緯や全体的な構成、こうした自己評価についての情報は、Engell (2002) の論文に依拠している。

² 底本は HS² を用い、プロティノスの翻訳はすべて拙訳である。以下、本論考の箇所の指示は、底本の章数と行数のみによって行う。

³ Ham (2021, 97) によれば、「落ちてくる」(4.10, ἐκπίπτουσα) には幾何学で使われる特殊な意味があり、例えば円錐面を形成する線が円錐の頂点から「落ちる」と表現される。〈自然〉は実際には線を描かないと述べているが、幾何学者との比喩を引きずった言葉遊びとも言えるだろう。

⁴ 〈自然〉の身分に関してはプロティノス研究で最も議論されているテーマの一つである。問題の現状については Wilberding (2022) を参照されたい。ここでは、この論争に踏み込まず、単に世界を形成・維持する原理であるとする。

⁵ Cf. Budé 2021, 285, n. 2; Igal 1986, 242, n. 18; Pradeau 2006, 58, n. 35. 研究会での発表時には、第 52 論考 (II, 3) 18.3–22 など扱ってこの点を詳しく説明したが、ここでは省略する。

⁶ 『ティマイオス』での世界の制作者はデミウルゴス(δημιουργός)と呼ばれるが(e.g. 28A6)、「職人」(handicraftsman)を意味する。しかしプロティノスは、第 30 論考第 2 章で、すでに自然の制作が職人のようではないとしている。

⁷ 『ティマイオス』のデミウルゴスによる創造・制作をめぐる古代哲学史上の議論とそこにおけるプロティノスの位置づけについては、Chiaradonna (2015) の研究が詳しい。

⁸ たとえば、第 45 論考 (III, 7) 第 12 章では、〈時間〉に自らの始まりを語らせ、第 47 論考 (III, 2) 第 3 章では〈世界〉に自らの出自や構成を語らせている。もちろん、Pradeau (56–7, n. 29) が指摘するように、自然の擬人化はプロティノスの独創ではない。古代ギリシアの自然の擬人化の歴史についてはアドの研究 (2004 [邦訳 2020], chap. 2) を参照。また Kalligas は〈自然〉のこの語りは「神官のようなトーン」(hieratic tone) だとしている (Kalligas 2014, 631–2)。

⁹ もちろん、なぜ医者と呼ぶのかと尋ねられて、「健康になりたいからだ」とその目的を答えることは日本語としても自然であろう。これは「なぜ」という問いが幅広いことを意味している。その点で、Armstrong の英訳 why、Pradeau や Ham の仏訳 pourquoi、Igal の西語訳 por qué motivo は曖昧である。

¹⁰ シンプリキオスによる引用を参照。Simplicius, in Phys. 258.14–25.

¹¹ Ham (2021, 95) は、この問いは無駄なものであり、そもそも問いを立てるべきではなかった ([i]l ne fallait donc pas poser la question)、と解釈している。反グノーシス主義の文脈で読む Ham は、世界の産出は「自然的なもの」であり、それについてグノーシス主義のようにあれこれと尋ねるべきではないとしている。「自然的なもの」だという解釈には賛同できるが、問いを立てるべ

きではない、とは述べられていない。〈自然〉は、自然的な産出についての理解の方式について言及しているにすぎない。

¹² 多くの論者は、この幾何学者の例示の背後にプラトン『国家』(VI, 510D–511A)があることを指摘している。その箇所ではプラトンは、知性的なもの(イデア)の探究に、思考が可視的なものや言葉を用いることを、幾何学者が幾何学的な四角形そのものの探究のために線を補助的に用いることになぞらえて説明している。ただし、注釈者たちが読み込む観点やニュアンスは若干異なっている。例えば Ham (2021, 96) や Igal (1985, 242, n. 17) は、目的が線を描くこと(世界を作ること)ではなく、観想にあることを示すための例示だとしている。Kalligas (2014, 632) は制作された物的世界の付随的・不完全な性格が強調されているとする。Pradeau (2006, 58, n. 34) は、プロティノスが観想と実践・制作の融合を読み込んでいるとしている。なお HBT (1964b, 369) や Ferroni (Budé 2021, 284, n. 10) は、『国家』の上述の箇所ではなく、別の箇所 (*Resp.* VII, 527AB etc.) を示しながら、幾何学者たちが常に存在しているものを図にして描くことが示されているとしている(ただし Ferroni は HBT を参照指示しているが、どのような解釈かは明確には示していない)。HBT が示唆する箇所に基づくならば、ここでの幾何学者の例示は、〈自然〉は常に存在するものを観想しながら、この生成変化する世界を生み出しているということを示すためのものになる。以下の私の解釈は、Ham や Igal に基づきつつも、プラトンへの依拠からは独立して、別の観点を読み込むものである。

¹³ 引用箇所の後では「行為や制作は、観想の弱さか付随物(παράκολουθημα)である」(4.39–40)と言われる。この一節からプロティノスが「行為」というものをどのように捉えていたのかをめぐって、Wilberding (2008) の論文を皮切りに、盛んに議論がされている (cf. Emilsson, 2012; Remes 2014, 2017)。ここではその問題には踏み込まず、たんに世界を生み出すことが〈自然〉の終極にはなっていないことを意味すると理解する。

¹⁴ プロティノスにおけるこれらの語については、Schroeder (1987) の研究がいまも重要な参考文献となっている。

¹⁵ Engell and Bate 版を用いる。以下 BL と表記するが、Engell and Bate による注も同表記によって示すことにする。

¹⁶ Engell and Bate が指摘するように、カント主義的な超越論が意識されている (BL I, 237, n. 2)。この時期のコールリッジは、以前に傾倒していたハートリー (D. Hartley, 1705–1757) の観念連合説 (associationism) やブリーストリー (J. Priestley, 1733–1804) の唯物論 (materialism) から離れ、スピノザやカント哲学の影響を強く受けている。この前置きは前者の立場を意識してのことだろう。ただし、BL 第 12 章後半で依拠するシェリング哲学を通して、スピノザやカント哲学も超克しようとしていることも示唆される。コールリッジの BL に至るまでの哲学的遍歴については Engell (2002, 59–74) と Halmi (2023, 209–24) の研究を参考にした。

¹⁷ Engell and Bate, BL I, 115, n. 1; 240, n. 3.

¹⁸ τίνος を男性形と取っている。HBT の *um wessentwillen* もこれに近いかもしれない。このような読みを排除する根拠はないが、第 2 節で論じたように、ここでは「誰のために」という行為の利害の対象となる人・ものというよりも、行為が向かう目的が問われていると言える。

¹⁹ この最後の一文についてコールリッジは独自の読み方を提案している。現代のスタンダードな読みでは、καί μοι γενομένη ἐκ θεωρίας τῆς ᾧδὶ τὴν φύσιν ἔχειν φιλοθεάμονα ὑπάρχειν となっているテキスト (4.5–6) は、Perna 版では καί μοι γινόμενῃ [sic] ἐκ θεωρίας

της ὥδι, [sic] τὴν φύσιν ἔχειν φιλοθεαμονα [sic] ὑπάρχειとなっている。γινομένη(女性単数主格の分詞)とするか、γινομένη(女性単数与格の分詞で、直前の μοι [sc. φύσει])にかかるとするかは、下書きのイオタは写本上表記されないため、文法上の問題であり、取り方によって意味が異なってくる。コールリッジは、この γινομένη(女性単数主格の分詞)の主語に相当するものとして、ὥδι = ὥδις (the birth) とする、興味深い読みを提案している。なお ὑπάρχειν (不定詞で、συνιέναι δεῖ を補って読む)か、ὑπάρχει かはあまり意味の違いがない。コールリッジは「新しいもっと正確な版が必要」と述べているが (BL I, 240)、それは 1835 年に出される Creuzer の Oxford 版まで待たなければならない。ただし、同じ Creuzer は 1805 年に第 30 論考のドイツ語訳・注を出しており、そこでは、γινομένη と読むべきだと提案している (1805, 82, n. 32)。シェリングはこの Creuzer の独訳・注を読み影響を受けたことは指摘されているが (Leinkauf 2019, 203–207)、コールリッジは見えていなかったようである。

²⁰ BL I, 255. もとのシェリングのテキストについては Engell and Bate が注で引いているテキストを参考にした (BL I, 252–4, n. 2)。

²¹ 語源はラテン語の *concurri* であり、「ともに (con)」と「走る (curri)」からなる。なお、συνιέναι の語源について、プラトンに『クラテュロス』では σύν と iέναι, *ienai* (「行く」という動詞 εἶμι, *eimi* の不定詞) の合成動詞であるとしている (Cra. 412a7–b1: Kalligas 2014, 632)。この語源理解は *concurrence* に近いと言えるだろう。Zusammentreffen も、「ともに」(zusammen: 英 *together*) と、「出会う・当てる」(treffen: 英 *meet, hit*) の合成語であり、συνιέναι の語源を συν-ιέναι (放つ) と理解するにせよ、συν-ιέναι (行く) と理解するにせよ、近いと言える。コールリッジがどちらの語源を意識していたかは不明である。いずれにせよ、συνιέναι と *concurrence* を結びつける解釈が正しいならば、後者の「協働」という邦訳はもしかしたら適切ではないかもしれない。ただし、その判定はコールリッジ研究者に委ねたい。

²² ギリシア語に造詣の深いコールリッジが、テキストの訳の際にテイラーを参照する必要性はなかったと思われる。いずれにしても、あまりテイラー訳を信用はしていなかっただろう。コールリッジのテイラーへの批判的な態度については Vigus (2009, 27–8) が参考になった。

²³ 英語の *understand* が *concurrence* との関連性を持っていないという点で、その不十分さを指摘し、注を付しているとしているとも言える。コールリッジは英語の持つ *understand* の意味を拡張しようとしている可能性もあるだろう (私はこの点に関して査読者の指摘に負っている)。

²⁴ HS³⁻⁴. ただし、ἐμοῦ とはせず、ἐμόν をそのまま写本通り印刷している。なお Ficinus も *metacente* とラテン語の絶対奪格 (ギリシア語の絶対属格に相当) にしており、コールリッジはこれを見ていた可能性がある。最新のギリシア語校訂を行った Ferroni は、σιώπησις のまま読めるので伝承されたこの読みを保持すべきだとしている (Budé 2021, 283–4, n. 5)。

²⁵ 邦訳は *realizing* を「ものごとを実感する」と訳しているが、ここでは次の節で説明されるように、自己自身の作用によって自己自身を存在させるような自己実現的なあり方を指しているように思われる。

²⁶ こうした自己知は、プロティノスの知性的な認識 (真理の認識) の根本的なあり方である。詳しくは Emilsson (2007, 107–122) の研究を参照。

²⁷ プロティノスは、世界を「自然の後のもの」(4.20, τὸ μετ' αὐτήν [sc. φύσιν]) としている。

²⁸ ただし、「美」と「善」が同一視できるわけではない。プロティノス哲学において「美」の身分と、「善」との関係については古くから多くの議論がある。ここではその問題には踏み込まない。「美」

をめぐるプロティノスの基本的見解と問題の導入については Emilsson (2017, 362–369)を参照。

²⁹ 本論文は、2023 年 8 月 29 日 (火) に兵庫県姫路市の「イーグレ姫路」にて開催された「第 6 回カルチュラル・グリーン研究会」で発表した内容の要点を拡大・展開して論じたものである。異分野の専門家の前で発表する貴重な機会をくださった兵庫県立大学の石倉和佳教授、研究会当日に多くの質問やコメントを寄せてくれたメンバー全員と、原稿を待ってくださったカルチュラル・グリーン研究会事務局にこの場を借りて感謝したい。また査読者には、不備の多い本論文を丁寧に読んでくださり、コールリッジ研究の視点から批判的かつ今後の研究につながる建設的なコメントをいただいた。その多くの指摘に応答することはできず不備は残ったままであるが、ここに深謝の意を表する。

＜参考文献＞

テキスト・訳註

- Armstrong Armstrong, A. H. 1980. *Plotinus. III*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press / London: William Heinemann.
- BL Coleridge, Samuel Taylor. 1983. *Biographia Literaria or Biographical Sketches of My Literary Life and Opinions*, 2vols, edited by James Engell and W. Jackson Bate. Princeton University Press.
- S. T. コウルリッジ. 2013. 『文学的自叙伝 文学者としての我が人生と意見の伝記的素描』(東京コウルリッジ研究会 訳), 法政大学出版局.
- Budé Ferroni, Lorenzo et Jean-Marc Narbonne, dir. 2021. *Plotin. Œuvres complètes. Tome II, Volume III. Traités 30 à 33 (III.8, V.8, V.5 et II.9)*. Paris: Belles Lettres.
- Creuzer Creuzer Friedrich. 1805. “Plotinos von der Nature, von der Betrachtung und von dem Einen, mit einer Einleitung und mit Anmerkungen.” In *Studien*, hrsg. von C. Daub und F. Creuzer, 23–103. Heidelberg.
- Ficinus Creuzer Frid. et Gerog. Henricus Moser eds. 1896. *Plotini Enneades dum Marsilii Ficini interpretatione castigata*. Paris: Firmin-Didot.
- Gerson Gerson, Lloyd P. ed. 2018. *Plotinus. The Enneads*. Translated by George Boys-Stones, John M. Dillon, Lloyd P. Gerson, R. A. H. King, Andrew Smith and James Wilberding. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ham Ham, Bertrand, 2021. *Plotin. Traité 30. Sur la nature, la contemplation et l'un*. Introduction, traduction, commentaire. Paris: Vrin.
- HBT Harder, Richard, trans. 1964. *Plotins Schriften*. Band IIIb. Neubearbeitung mit griechischem Lesetext und Anmerkungen fortgeführt von Rudolf Beutler und Willy Theiler. Hamburg: Felix Meiner.
- HS¹ Henry, Paul et Hans-Rudolf Schwyzer, eds. 1951. *Plotini Opera*. Tomus I. Paris: Desclée de Brouwer/Bruxelles: L'Édition universelle.
- HS² Henry, Paul et Hans-Rudolf Schwyzer, eds. 1964. *Plotini Opera*. Tomus I. Oxford: Clarendon Press.
- HS³ Henry, Paul et Hans-Rudolf Schwyzer, eds. 1973. *Plotini Opera*. Tomus III. Addenda

- ad textum. Paris/Bruxelles: Desclée de Brouwer/Leiden: Brill.
- HS⁴ Henry, Paul et Hans-Rudolf Schwyzer, eds. 1983. *Plotini Opera*. Tomus III. Addenda ad textum. Oxford: Clarendon Press.
- Igal Igal, Jesús. 1985. *Plotino. Enéadas III–IV*. Introducciones, traducciones y notas. Madrid: Gredos.
- Kalligas Kalligas, Paul. 2014. *The Enneads of Plotinus. A Commentary I*. Translated by Elizabeth Key Fowden and Nicolas Pilavachi. Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Perna Perna, P. ed. 1615. *Plotini Opera Omnia*. Cum latina Marsilii Ficini interpretatione et commetatione. Basil.
(https://archive.org/details/bub_gb_oddAmniDZPEC/page/n5/mode/2up)
- Pradeau Pradeau, Jean-François. 2006. *Traité 30 (III, 8). Sur la contemplation*. Présentation et traduction. In L. Brisson et J.-F. Pradeau, dir. *Plotin. Traités 30–37*. Paris: GF Flammarion.

二次文献

- Chiaradonna, Riccardo. 2015. “Plotinus’ Account of Demiurgic Causation and Its Philosophical Background.” In *Causation and Creation in Late Antiquity*, edited by A. Marmodoro and B. D. Prince, 31–50. Cambridge: Cambridge University Press.
- Emilsson, Eyólfur Kjalar. 2007. *Plotinus on Intellect*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2012. “Plotinus and Plato on Soul and Action.” In *Plato and the Divided Self*, edited by Rachel Barney, Tad Brennan, and Charles Brittain, 350–67. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2017. *Plotinus*. London / New York: Routledge.
- Engell, James. 2002. “*Biographia Literaria*.” In *The Cambridge Companion to Coleridge*, edited by Lucy Newlyn, 59–74. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hadot, Pierre. 2004. *Le voile d’Isis. Essai sur l’histoire de l’idée de Nature*. Paris: Gallimard.
- ピエール・アド. 2020. 『イシスのヴェール 自然概念の歴史をめぐるエッセー』(小黒和子 訳), 法政大学出版局.

- Halmi, Nicholas. 2023. "Coleridge's Philosophies." In *The New Cambridge Companion to Coleridge*, edited by Tim Fulford, 209–224. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leinkauf, Thomas. 2019. "Schelling and Plotinus." (transl. by S. Gersh). In *Plotinus' Legacy*, edited by S. Gersh, 183–216. Cambridge: Cambridge University Press.
- Remes, Pauliina. 2015. "Action, Reasoning and the Highest Good." In *The Routledge Handbook of Neoplatonism*, edited by Pauliina Remes and Svetla Slaveva-Griffin, 453–69. London / New York: Routledge.
- . 2017. "Human Action and Divine Power in Plotinus." In *Divine Powers in Late Antiquity*, edited by Anna Marmodoro and Irini-Fotini Viltanioti, 38–60. Oxford: Oxford University Press.
- Schroeder, Frederic. M. 1987. "Synousia, Synaesthesia and Synesis: Presence and Dependence in the Plotinian Philosophy of Consciousness." In *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, Teil II, Band 36, 1 Teilband, 678–699. Berlin.
- Vigus, James. 2009. *Platonic Coleridge*. London / New York: Routledge.
- Wilberding, James. 2008. "Automatic Action in Plotinus." *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 35 (Winter): 373–407.
- . 2022. "Nature: Plotinus' Fourth Hypostasis?" In *The New Cambridge Companion to Plotinus*, edited by L. Gerson et al., 312–37. Cambridge: Cambridge University Press.